(1) 認知科学の中の言語学

(2) 現代の言語科学：ことばを通して人間の本質 Human Nature に迫る

(3) 生成文法 Generative Grammar ・生物言語学 Biolinguistics

(4) A) 母語話者の言語知識（＝文法）
B) その獲得（母語習得）
C) その使用
D) 言語の脳神経基盤
E) 言語の起源と進化

(5) 統一化問題 Unification Problem
言語科学の知見を他の諸科学（特に中核的自然科学）へ統合

(6) 言語機構 Faculty of Language; 言語器官 Language Organ
人間の脳内に実装された文法能力：脳内文法、心的文法

(7) 言語内在論：
I-Language; internalized, individual, intensional
cf. 言語能力 competence と言語運用 performance

(8) 言語能力は人間だけが持つ種固有の species-specific 生物学的能力であり、その仕組みと個体発生、系統発生のプロセスを、他の諸生物種の諸能力と同じスタンスで解明する

(9) 言語学は最終的には生物学の一分野

(10) 方法論的自然主義 Methodological Naturalism

(11) 言語獲得の論理的問題 Logical Problem of Language Acquisition
刺激の欠如 poverty of stimulus
「プラトンの問題」Plato's problem

言語知識の獲得を単に刺激に対する反応として見た場合、対応する刺激がそもそも存在しないような知識は説明できない。
驚くべき事実、説明を要する観察：
母語の獲得はすべての(正常な)ヒトの幼児が、貧弱かつ不均質な刺激下で極めて短期間の間に間違うことなく行う。

(12)　　母語獲得

(13)　　**Universal Grammar (UG; 普遍文法)**

ヒトに固有の遺伝的資質の一つとして、母語獲得を可能にするバイオプログラムが存在する。

これは言語機構の初期状態であり、ヒトの精神・心を構成する部門(モジュール)の一つである。

各個別文法（脳内文法）は、UG が異なる環境下で異なる具現化を受けたもの。

UG は経験を個別文法に写像する関数であり、人間言語の可変領域を予め制限することで、言語獲得を可能にしている。

(14)　　生得性の仮説 Innateness Hypothesis

言語知識のすべてが生まれつきだということではなく、経験に基づく言語獲得を可能にしている生得的認知基盤が存在していなければならない、ということ。

Nature or Nurture（氏か育ちか）の二者択一ではない。

(15)　　UG 自体は人類にとっては進化の産物としてすでに与えられているもの。
なぜ UG が提案されるような特性を持っているのかは、UG 自体の起源と進化に遡って説明されなければならない。

(16)　　言語変化の論理的問題 Logical Problem of Language Change

UG が PLD に基づいて正しい母語文法を獲得することを保証するものなら、なぜそもそも言語の歴史的・通時的変化は起こりえるのか。

(17)　　言語進化の論理的問題 Logical Problem of Language Evolution

言語がヒト種固有であり、他のいかなる生物も言語の先行物を持たないのであれば、言語はそもそもどうして発生可能であったか。